

「書くこと」による児童理解

—奈良女子大学附属小学校の児童理解に学ぶ—

創価大学教職大学院

若井幸子

要 約

奈良女子大学附属小学校（以下奈良女附属小）の教育は、大正期新教育運動の指導理念であった児童中心主義に基づいた教育であり、そこには、木下竹次（以下木下）の『学習原論』¹に学び、児童理解の確かな方法論を持つ教師達の存在がある。これまでの研究（「児童理解を深める教師達」以下「前稿」とする）で、奈良女附属小の教師達の優れた児童理解は、木下が教育実践を行った大正期以来、奈良女附属小における児童中心主義の中核の位置にあるということが分かってきた。そこで今回の研究で、木下の『学習各論』²と比較、検討しながら、奈良女附属小の教師達の児童理解を「書くこと」を中心にして考察した。日記指導や自由研究、ノート指導など「書くこと」を学習の重要な方法論として位置づけている奈良女附属小が「児童理解」を深めていく様子、特に、「日記指導」を中心にしながる奈良女附属小の「成長し続ける」教師達が児童理解をどのように進めているか、その一側面を考察した。

I はじめに一児童理解を考える

創価大学の創立者池田大作先生（以下創立者）は、『新・人間革命』「若芽の章15・16」（2013年11月6日、7日付け聖教新聞）で「教育の根本には、人間をいかにとらえるかという、正しい人間観がなければならない」と述べ、創価教育の創始者牧口常三郎先生（以下牧口）の『創価教育学体系』³より「教育は知識の伝授が目的ではなく、学習法を指導することだ。研究を会得せしむることだ。知識の切売や注入ではない。自分の力で知識することの出来る方法を会得させること、知識の宝庫を開く鍵を与へることだ。勞せずして他人の見出したる心的財産を横取りさせることでなく、発見発明に過程を踏ませることだ」との文を引用して「教育は知識を与えることを目的

キーワード：児童中心主義 児童理解 日記指導

とするのではなく、自分で考え、自分で得た知識を生かしていく方法を会得するためにあるのだ」「どうすれば生涯、幸福生活を送らせることができるかをテーマにしている」と教育の目指すべき目的を述べている。また、教師に対して「子どもの将来を考え、一人ひとりが、幸福な人生を生き抜くために、何が大切かを熟慮し、教育にあたっていくんです。皆さんが、この学校で行っていくことは、子どものための教育革命でもあるんです」⁴と東京創価小学校建設にあっていた草創期の教師達に万感の期待を寄せていた。

子ども達一人ひとりが、自分自身の無限の可能性を開花させて、価値創造の喜びの人生を歩むことこそ創価教育学の目的であるとするならば、一人ひとりの児童をどのように理解し、児童の日々の行動や考えをいかにとらえるかということ抜きにして児童の成長は望めないし、適切な指導も出来ない。そして、当然のことながら、子供達を日々指導している教師が、どのように児童一人ひとりを理解するかということに、その教育の成否の大半がかかっているといっても良いだろう。

「伸一は、創立者として、一人ひとりの成長への責任を感じていた。いや、子どもたちの人生への責任を感じていたと言ってよい。その責任感は、“少しでも児童の様子を知りたい”との強い思いとなり、間隙を縫うようにしての訪問となったのだ」⁵と述べているように、実際に一人ひとりの児童の様子を知る努力を惜しまず、東京創価小学校をたびたび激励に訪れ、教師に範を示していたのである。筆者も創立者が度々児童一人ひとりを激励している場面に居合わせた教師の一人である。

奈良女附属小の第四代主事となって赴任し、奈良の学習法の作成に力を注いだ重松鷹泰は、「周辺をまわる子ども」と題して「学習研究」1983年6月第283号に次のように特別寄稿を寄せている。

それは、重松自身の児童理解がいかにその場限りの浅いものだったかとの反省をしたものだった。Jさんという児童が成長し、33年を経て後の出来事で、重松自身のその児童に対する児童理解を振り返る考察であった。

その内容は以下のとおりである。

重松はJさんという児童（当時7歳：小学校2年生）を「周辺をまわる子ども」と理解し、「自分のすることに本当に打ち込めない。みんなとっしょの作業の中核にはいっていかなくて、周辺をウロウロしている」と判断し、周辺をまわっている子という意味で問題を抱える児童だととらえていた。そして、「Jさんは、上二人下二人の男兄弟の間にはさまれて、独自の位置がみつめられないために、人々の中で自分を見とめさせようとする方向に関心が集中し、それが悪循環を起こしているのではないかと思う。一応そのようなものからはなれて、自分が自分で楽しい建設的な活動をしていくことが、有効であるということ、この子が理解したときに、この子の性格の中にある何か不透明なものは、次第に消えて行き、もっと自由な頭のはたらきが可能

になるのではないかと思う」と述べている。

ところが、その児童理解を覆す出来事があったのだった。

このJさんが33年後に機転を利かせて小学校3年生の児童を浮浪者から助けたという話を聞き、重松がもう一度自分自身の児童理解を振り返ったのである。

それによると、「33年経った今、私はこのときの考察の不十分であったこと、否、誤っていたことを認め、Jさんに謝らねばならないと思うのである」として、Jさんの他への気配りをおせっかい、ややしつこい、うるさいとしか見ることが出来ず、その後もずっと「まわりの人々をふくめての生活を、明るいもの、それぞれの人の納得のいくものにしよう」という生き方としてとらえることが出来なかったとしている。児童理解の難しさを語っている一例ともとらえられるエピソードである。

また、前稿⁶「児童理解を深める教師達」で取り上げた木下竹次のエピソードでも指摘したところであるが、「木下先生は、全校生徒の家庭事情のこと、からだのこと、成績や特技のこと、ほんとにたんねんにござんじでした。校庭でも廊下でも声をかけてくださる時はかならず名前をおっしゃって、しかも私だけの問題にかゝるような話題なのです。…卒業してからも必ず任地を巡回してくださって、懇切な、しかも厳しいご指導と激励をしてくださいました。卒業後先生にお会いするたびに先ず涙が出そうな気持ちがするのです」と教え子が振り返っているように、一人ひとりの児童生徒をどう見ていくか、そこには深い愛情とも言うべき教師の人格に支えられた児童理解に対する不断の積み重ねと努力があるのである。

重松の33年後を振り返る児童理解に対する姿勢といい、木下を懐かしむ生徒の声といい、奈良女附属小が培ってきた児童理解の真摯さを感じると共に、奈良女附属小での児童理解は、その時だけの判断で考える児童理解ではなく、長い目で見ることが大切であるという児童理解と教師の関係の深さを示唆してくれるものであった。

そして、創立者のいうところの教師が「人間をいかにとらえるかという正しい人間観」を身につけることの至難さを改めて痛感し、児童理解を深めていく方法を含め、「正しい人間観」に常に立とうとする姿勢の必要性を再確認したところである。

Ⅱ 奈良女附属小における「書くこと」による児童理解

それでは、奈良女附属小の教師達はどのように児童理解を進めているのだろうか。奈良女附属小における児童理解の姿を考えると、今、各学級で実践されている自由研究、日記指導、授業の振り返りにみることができる「書くこと」による児童理解を先ず筆頭にあげたいと思う。児童理解の範囲はその方法も含め、児童生徒の生活環境から日々の授業実践まで広範囲にわたる。児童理解をいかに的確に、また、時宜を得たものにするか、このことは教師が常に学級経営の大前提として要求されていることでもあるし、常に変化し成長していく子ども達をどう理解するか、教師をいつも悩ま

す問題でもある。

であるからこそ、常に「書くこと」の中に児童の成長の様子を発見し、その心情などをきめ細かく見出そうとしている奈良女附属小の取り組みが生まれてきたのではないだろうか。その思想的な源流として、木下の学習各論における国語学習への取り組み、思索があると考えた。

1 『学習各論』における「書くこと」

木下は『学習各論』下において国語学習の要旨（国語生活の核心は綴る心）⁸と題して国語生活は思想交換の生活であり、思想交換の心身作用を通じて自己の発展に参するものは発展的国語生活であり又国語学習生活であるとの論を展開している。そして、さらに木下は、同じく『学習各論』において生活発展主義による綴り方について「自ら進んで綴るべき生活内容を定めてこれを整理し統制してこれを文に綴り、之に適当なる文題を附して教師に提出するようになれば、凡そ綴り文の習慣は出来たのである。かくして多く作れば文は自ら上達する。この時人生の全方面に互って学習経験処世の三種に材料を発見する様になれば綴るべきものが得られなくて困るようなことは無い」⁹と述べている。児童個人の学習の中核として「書くこと」を位置づけ「狭義の言語は有節音から成るものであるが広義の言語には絵画建築劇等をも含む。此等は何れも思想を表示するから言語と見做すことが出来るのである。国語生活には此の如き広義の言語を含まないけれども間接には絵画手工劇等に密接に関係して居る」¹⁰としてあらゆる生活全般にわたって児童の言語活動はその本人の思想交換の心身作用の現れであると捉えていた。すなわち、木下は学習生活の中心に国語をおき、さらにその中核に「書くこと」の作業を位置づけ、児童自らに「書くこと」を日常的に習慣化させ、その結果として国語学習を他の学習の基礎基本としたのである。

その源流を汲んだ実践が、現在行われている奈良女附属小における「書くこと」の実践であると考えてみると、現在行われている自由研究、日記指導、学習の振り返りの作文等は生活全般にわたって行われている言語活動であり、「日記指導」はまさに、日々行われている「児童その本人の思想交換の心身作用」の中核であるにとらえてもよいと思う。その中核的存在としての「日記指導」に注目した。

2 「日記指導」の実践：自身の体験より

筆者自身は東京創価小学校で5、6年の学級担任をしていた時に「教室日記」と題して学級通信を毎日児童に配布していた。学級経営と児童理解のために、児童の日記をその「教室日記」に掲載し、児童とともに読みあい交流していた。児童の日記であるから、当然のことながら、個人情報には十分気をつけて引用していたが、毎日の日記には日々起きる様々な出来事に対して子どもたちがありのままに綴る姿が見られ、それがお互いの共感を呼び、友情を深めるきっかけとなった。また、その日記の中に

様々な学級作りのヒントがあっただけではなく、教師自身が見落としていた友人関係や教師の対応の仕方が良かったかどうかなど、学級経営に大切な示唆を与えてくれた。そして、表面的な会話では捉えられない児童自身の思索や思い、授業時間や休み時間では聞き取れなかったつぶやきなども知ることが出来たのである。

その当時の児童N君は、卒業を前に「朝、この『教室日記』が配られると、面白くて朝のスタートが気持ちよくなりました。二年間の記録が残ったけれど、ただ二年間残ったのではなく、その一日一日のみんなの様子、みんなの気持ちがファイルに残ったようで、みると、卒業してもこの6年2組のみんなの気持ちがいつでもうかんでくるようです」と記している。このように、「教室日記」を通じて、それぞれが書いた日記に記された思いを共有でき、「友達のことが良く分かった」、「自分の存在が学級の中で認められた」と感じている声が多くあった。(1993年3月16日「教室日記」No. 219最終号アンケートより)

日記指導を「豊かな心で意欲的につづる子どもを育てる学習指導方法の研究」で取り入れた佐賀県鹿島市立能古見小学校大川内加代子教諭の実践¹¹でも「日記の読みあいを通して、友達のことを知る喜びや、自分のことを知ってもらい喜びを感じ取ることができた」「友達の日記の表現の良さを学ぶことにより、書く技術が向上した。共通体験を話し合うことで、書く題材が広がった。また、書かれたことの内容の良さに触れることで、物の見方・考え方が深まり、周りの人たちとのかかわりや周りの様子が詳しく書けるようになった」「読み合いを通して、今まで知らなかった友達の新たな面を知ることができ、児童相互の理解が深まった」と研究をまとめている。

日々成長している子どもたちをどのように理解し学級経営をしていくのか、子どもたちが意欲的に取り組む授業をどのように展開していくのかに、教師は日々直面している。

筆者の実感も、毎日「教室日記」を作成し続けることは大変な時間との戦いであったが、筆者の日々の児童理解、学級経営に欠かすことの出来ないものが児童の「日記」を「教室日記」に掲載し続けることであった。毎日を振り返り、児童一人ひとりの日記に目を通し、次の日の学級経営に生かしていく、このリズムがあって、一人ひとりの児童への対応が時宜をえたものとなったというのが実感であった。

そういう実体験から、奈良女附属小で、「書くこと」の中核をなす「日記指導」がしっかりと学習と児童理解の骨格としての存在になっている姿を参観し、その實際を研究の視点で追究することは、奈良女附属小をさらに深く、確かに学べるのではないかと創価大学教職大学院の授業科目の一つである「教育課題実地研究」によって訪れた当初より考えてきたことである。

お互いに「日記を共有する」ことは、児童一人ひとりを教師が理解するという縦の関係と、児童自身がお互いによく理解しあうという横の関係の人間関係を、より深く築く手段であるとも言えるのではないかと考える。もちろん日記だけが「書くこと」

ではなく、学習の振り返りや、授業の感想なども含め生活の中に木下が指摘したように「綴ること」を中心におくことととらえたい。

また、言うまでもなく、日記指導が定着していくには、教師と児童との信頼関係の構築、そして何よりも学級そのものが奈良女附属小でいうところの「学習即ち生活」であり、生活直ちに学習となる。日常一切の生活、自律して学習する処、私共はここに立つ。他律的に没人間的に方便化せられた教師本位の教育から脱して、如何に学習すべきか。如何にして人たり人たらしめ得るか、そのよき指導こそ教師の使命である。…」¹²との学習を進める基盤があつてのことである。

3 奈良女附属小における学習の中核としての日記指導

奈良女附属小に「教育課題実地研究」で訪れるたびに感心することは、常に堂々と「自己表現」できているということである。そして、その背景には、常に「よく書いている」という実践があるということが分かってきた。

「日記の表現論」との主題のもと、学習研究455号（2012年2月号）に梶田萬理子先生（以下梶田先生）、日和佐尚先生（以下日和佐先生）谷岡義高先生（以下谷岡先生）が日記指導を通して自律的に学ぶ子どもを育む様子を述べている。

（1）学習と生活をつなぐ日記¹³

梶田先生は奈良女附属小の「日記指導」を

- ① 学習力の基盤にあたる「気づく力」の育成
- ② 「自分を見つめる目」の深まり
- ③ 「人と人をつなぐ日記」との視点を持つ

との3点から考察している。

はじめに、大正九年に清水甚吾訓導が毎日書くことの重要性を指摘していたこと、大正十五年には秋田喜三郎訓導が「英子の日記 お母さんの病氣」と題して子ども向けに全国の児童に見本を示していること、また、昭和四年には河野伊三郎訓導が毎日の日記を書くことによって物の観察が緻密となるので幼少の頃より習慣化し、日記を書く必要感を養うことが大切である等を述べているという歴史を振り返った上で、日記を書くことによって、低学年では「生活から題材を発見する力」「まだ着眼していない方面から題材を選べるように子どもたちの生活に刺激を与える大事さ」を自律的に学ぶ子どもたちを育てる要点としてあげている。

奈良女附属小では、30年ほど前から全校で「日記」「見たこと帳」「学習ノート」において「書くこと」の習慣化がなされていった。

自ら気づく力は学習力の基盤であり、「よく見ること」から始まると考え、その意味で、低学年では「日記」を奨励しながら自分の「気づく力」を育て、朝の会などで表現する楽しさを味わい「日記」を書き続けていく態度を養う。そして、「気づく力」を日記で育てるとともに、中学年では、積極的に友達のよさを見つけ、学校生活の

「ふりかえり」や「とらえ直し」をしながら書く「日記」を進めていく。このように「日記」は考え続ける自分、問い続ける自分をつくる時間になっている。すなわち、自分の考えを深めていくという「自分を見つめる目」が育つとしている。

そして、筆者が感じていたことと重なる所感でもあるが、梶田先生はこのような日頃の「書くこと」の積み重ね、「日記指導」によって「ひと・もの・こと」への関心が深まり、最終的に「人と人をつなぐ日記」になると考えていた。

具体的に梶田先生は自身の実践を通して「教室では、日記によって日頃の学習が広がったり深まったりすることが度々起きる。それは、日記には、タイムリーに個々の関心どころ、目の付けどころが表現されるからである。例えば、友だちの自由研究の発表を聞いて、興味をもった子どもが、新たな問いを投げかけたり、調べてみたり、あるいは、今日の学習を問い直したりする子がいる。また、価値ある体験の報告や学習への願いが出てくると、みんなで共有しようという声が上がったり、追及の糸口になったりする。教師には、毎日紹介したい内容のものがあがり、その良さを学級で広めることができる。日記は、人と人をつなぐ生きた教材ととらえられる。(中略)一方、教師は、日記を読むことによって、『子ども理解』を深め、個々の生活創造を支えるために、どうあればいいのかを探る。一人ひとりを知る貴重な糸口になっている」としている。筆者も「日記指導」を続けてきて、同様な実感を持っているが、学習と生活をつなぎ、子どもたちの生活創造の拠り所となっている「日記指導」が奈良女附属小で実践されている。以上の点を梶田先生は実践をもとに強調している。

(2) 日記指導の要点と日記の効果¹⁴

筆者をはじめ、全国各地で「日記指導」を実践している教師は数多く、その効果も梶田先生が述べているような内容で、共通認識されているところでもある。しかし、「日記指導」が優れた効果を有するとしても全校での実践として教師各自の自主性にまかせて行うことは大変難しい。なぜなら「日記指導」を実践するには大変な労力が必要だからである。どの学校でも幾人かの労を惜しまぬ教員がこつこつ続けている「日記指導」という側面があるのは事実であり、従って全校での実践になることは少ない。

この奈良女附属小では、教師集団が良いと思うことは積極的に取り入れ、その実践は各教師の自主性に任されている。当然のことながら「日記指導」は強制されたものではなく、30年以上にわたって全学級で取り組まれているものであるが、その目的・方法は学校挙げての共通点が特にないのである。日々、大変な労力を要する日記指導であるが、労を惜まず30年以上も全校で「日記指導」に取り組んでいるという事実、筆者が「日記指導」を効果的に活用している奈良女附属小の教師の姿を見直してみたいと思った最大の理由でもある。

日和佐先生が、参観した先生方から「学校の研究として、どのように一致体制をとっているの」というおたずねをよくされるそうであるが、その返答として、「考え

てみればこれという程の一致体制をしいているというものは見当たらない。ただ『学習法』を拠り所にしてしていることが、皆の共通事項である」つまり、「子どもを正面に据えて、子どもの育ちを促し、それを子どもとともに喜ぶこと」「子どもの生活を拡充するための環境を整えること」であると述べている。

つまり、そのことが、30年以上も全校で「日記指導」が続いている答えに当たるのではないだろうか。

まさに、「児童理解」を深めていくための「日記指導」であり、児童中心主義に徹する教師であるがゆえに児童理解する最高の方法であると考えているのではないか。児童中心主義の教師の面目躍如たるものがこの共通実践にあると思う。成長し続けている教師集団のなせるわざとも言えよう。

日和佐先生は日記指導の要点、そして日記の効果について簡潔に論じている。

あくまでも日和佐先生が自分で取り組んだ日記指導の要点であり、効果なのであるが、日和佐先生自身が、自己評価している効果や内容を見てみると

- ① 「日記は、子ども自身の宝物である」
- ② 「六年間やり続けることが可能なものである」との2点を目的に日記指導をしている。

入学式から卒業式の二日前まで続けるための保護者への協力要請、細かい学年ごとにノートのマスを変えたり、書き方の指導をしたりと、その活用や保存の仕方なども実に丁寧に取り組んでいる。このように労を惜しまず指導することがあって6年間続けることができるのであろう。

6年生では、毎日660字から1064字書くという日記は、6年間で平積みすると高さは1メートルになるという。学習の「ふりかえり」との関連がある奈良女附属小ならではの日記指導の効果として、日和佐先生は「家庭と学校がスケルトン状態で協働の場を作るという効果、子どもが一日の生活を見つめ、振り返ることによって、自分との対話ができ、生活の発展・生活の拡充が行われる」ことをあげている。『『学習力』を育てる基礎基本』を読んだ6年生児童が「毎日日記を続けて書くということは、自分の生き方に人生を与える」との言葉を引用し、日記を書き続ける決意を述べている。6年間で学習の中核として「書くこと」が身につけている様子が伺えた。

そして、日記を「やめてしまうきっかけ」を作らないこと、嘘はいけないが「事実のうちに取捨選択し書く」自由を大切にすることなど、細かいことだが日記指導のホシも日和佐先生は記していた。

「奈良の学習法」を支えている「教師自らの自発性」によるところの「日記指導」が、優れた「児童理解」の方法であるということを理解している教師集団があり、そして、教師集団の根底にその共通理解があってお互いが「日記の効果」を認め、労を惜しまず実践しているということをこの日和佐先生の論文で改めて確認できた。

(3) 一年生の日記の育ち¹⁵

谷岡先生は、1年生での日記指導の実践を通して、谷岡先生の視点で「日記の価値」や「学習と日記のつながり」について以下のように述べている。

① 日記は学習の基礎であり真の学習法が育つ

② 日記は教師にとって、学習と生活をつなぐ学習を育てる最高の手立てであるとしている。

また、日記のプロに学ぶことも提唱し、その学ぶ理由はといえば「日記には、作者や研究者の背景にある実際の生活がそこにはあり、その人から文学や研究が生まれる生活の状況が記されているから」ということを挙げている。日記自体が文学作品であり、思索ノートであり、調査の記録ノートであり、一番大切な活動であることからすれば、「忙しい時ほど、私たち教師には日記が大切です。なぜなら、教育は場当たりの仕事ではありません。探検家のような克明な記録ノートが必要で、さらに哲学者の日記のような思索のための記録が必要になってくるからです」と、自分自身も毎日日記を付けて教育活動に取り組んでいる。

そして、一人ひとりの児童の育ちを追う視点を一年生の「学校初日の日記」から発見している。そこでは、内容に何をどのように取り上げるのかでその子の生活、感性、こだわり、見方が現れるとして、それぞれの児童の特性をすでに理解して日記を読んでいるのである。そして、一年間のT児童の成長ぶりを例に挙げ、T児童の一年生最初と最後の日記を掲載している。筆者自身も成長ぶりに大変驚いたのでそのまま転載することにした。以下がその日記である。

○Tくんの学校初日の日記「きょうは、おとうさんと、いっしょにいこままでいきました。そして、おかあさんを、むかえにいったらおかあさんがいませんでした。そして、バスのうんでんしゅさんがたすけてくれました。」

○Tくんの一年生最後の日記「ケーブルカーを乗りついで、生駒山まで行き、暗がり峠まで上り下りしながら4km歩きました。2回休けいしながら歩いたけど、全然つかれませんでした。朝ご飯をたくさん食べて体力モリモリにしておいたからだと思います。谷岡先生は『奈良と大阪をつなぐ道です』とおっしゃっていたので、その事について調べ学習をしました。この道は古くから『暗がり峠奈良大阪街道』として、建設省の道100選に選定されていて、標高が455mあります。生駒を越える峠には、ほかにもたくさんありますが、峠の標高が低いことや、大阪と奈良の最短キョリであることから頻りに利用されているそうです。(後略)」

このようにT児童は、よほど深く学習しなければ理解できないような内容の日記を、一年生の最後の段階で500字ほど記している。

T児童の一年間の成長の事例を挙げてみたが、谷岡先生がT児童だけでなく「どの子どもの日記も、量、質ともに一年生の日記と思えない内容になっています」と述べている。なぜ、このような深い学習に迫るまでに日記を書けるようになるのだろう

か。

「日記は学習の基礎であり、日記を真剣にかけない子どもは、真の学習法が育たないと考えているからです」と谷岡先生が述べているように、日記の内容について

- ・その日の気になる学習のふりかえりを思い出して書く
- ・自由研究発表の要約を書く
- ・自由研究発表で質問されたことの調べ直しを書く
- ・独自学習として自ら調べる内容を書く

谷岡先生は自身の実践の中で『『独自学習』の原型が育っていく受け皿として、日記がある』とその要点を記し、日記の中には「教師から見た授業の記録」「子どもの日記」「教師の日記」その三つが合わさっていて、それらを子どもも親も読むことができる。子どもの思い、教師の思い、親の思いが合わさった日記学習になったとしている。

このように、プロに学び、教師として試行錯誤を繰り返しながら質の高い学習に仕上げていく日記指導を展開している。

梶田先生、日和佐先生、谷岡先生の日記指導の取り組みはそれぞれの色合いがちがっても「奈良の学習法」の基本である「子どもを正面に据えて、子どもの育ちを促し、それを子どもとともに喜ぶこと」「子どもの生活を拡充するための環境を整えること」がそれぞれの実践の骨格となっている。児童中心主義の基本理念を失わず、教師自らが研究開発し続けている姿がそこに現れている。

前稿で奈良女附属小の児童理解には

- ・第一点は児童に対する温かな眼差し
- ・第二点は児童理解に迫る方法論の確かさ
- ・第三点は児童理解を確実にする不断の教材研究、その深さ

があると述べたが、今回もその三点を「日記指導」を通して確認することができたと考ええる。

改めて、谷岡先生が綴っている「まほろば」No. 47号（平成12年4月24日）の内容の重さを感じる。その労をもう一度確認するために以下に引用する。

日記指導にかかる時間について、「日和佐先生は、夜の8時から12時が自分の仕事タイムです。私は電車の中や図書館で、仕事や読書をします。私は家が遠いので、日和佐先生のように毎日家で4時間は出来ませんが、2時間ぐらいはします。そして、春休みも日曜日、殆ど一日中コンピューターに向かって仕事をしていることが多いのです。しかし、なかなか思うように仕上がっていきません。いったいそんなに何をしているのでしょうか。それは、子ども達の学習の記録をいかに書き残すか、いかに表現するかを、苦心しているのです。教育を表現する仕事、目の前のこの子達の学びを書き留める仕事は、とても時間がかかるのです。しかし、私たちの教育実践は、こ

の毎日の積み上げから始まると思っています」と。子どもたち一人ひとりの日記を毎日読み、それにコメントを入れる作業でも2時間はかかるとのことであった。

教師から見ると日記指導は「一人ひとりを知り、子どもたちの一日一日に価値を与え、さらに自分自身が子どもたちの目を通してともに伸びる」ことである。そして、「日記」の意義を子ども達から考えてみると「自分自身を知り、自分の学びの場を広げる」ことになるのである。

従って、前項で述べた奈良女附属小の児童理解の三点それぞれに「一人ひとりの」という言葉を付け加え、奈良女附属小の児童理解には

- ・ 第一点は一人ひとりの児童に対する温かな眼差し
- ・ 第二点は一人ひとりの児童理解に迫る方法論の確かさ
- ・ 第三点は一人ひとりの児童理解を確実にする不断の教材研究、その深さ

があるとしたい。

Ⅲ 再び奈良女子大附属小で学ぶ意義を考える

『教育実践の原理』¹⁶「実証科学的研究方法の性格とその限界」の中で、高久清吉は、「授業の実際はその課題と方法様式と結果という三つの構成要素の間で作用する客観的な法則によって支配されている」また「授業の実際は合理的な要因ばかりでなく、そうたやすくは割り出せない非合理的要因も含め、さまざまな要因が複雑に織りなされて成り立っている独特の構造体である。それゆえ、この現実現場は簡単な因果関係や単純な図式によって単線的に分析できない。この分析のためには、構造体の性格に適合した独自の構造分析が必要となる」¹⁷とし、教育研究のあり方を科学的分析の対象になるとする考え方、そして、もう一方で一人ひとりの教師に特有な実践方式の独自性を切り捨てたのでは教育の実践場面は骨抜きになるという考え方をあげ、社会科学的教育現実観と精神科学的教育現実観の捉え方の違いを乗り越える第三の立場を提唱している。

すなわち「教育現場人の『実践的立場』をあげたい」とし、「教育場面の決定的な特徴として歴史性と自由があげられる。物の存在と違って、人間の存在が生きたものであるといわれるのは、人間が自由な歴史的存在だからである。…教師も生徒も、そのひとりひとりがそれぞれに独自の過去とのつながりで今に生き、未来もまた、それぞれによって独自に先取りされて今にはたらいっている。このように人間がいっしょになって作りあげられている教育の生きた実践場面は、科学的論理的な筋道だけによって分析されることができるような単純なものではない。だからといって、この場面が無法則的なものだということではない。ここには物的場面とは性格を異にするこの場面特有の法則性が宿っている。この法則性を明らかにするためには、単なる量的分析ばかりでなく質的な分析、単なる一般化、抽象化ばかりでなく個別的な深まりが欠かせ

ない。つまり、教育場面の独自の構造に適合した独自の構造分析が必要である』¹⁸というのである。

この二つを統一する第三の立場として教育現場人の「実践的立場」は、「実践場面のただ中であって、自分自身の実践そのものを正しく方向づけていこうとする立場である』¹⁹と述べている。

高久の論をあえて奈良女附属小の実践に当てはめて言えば、前稿で指摘したように、奈良女附属小で、児童中心の「学び」、学習がどのようになされているのか、その最大の環境としての「教師」は学習にどのように関わっているのかを追究していくことが、第三の立場、「実践場面のただ中であって、自分自身の実践そのものを正しく方向づけていこうとする立場」に当てはまるのではないだろうか。

30年間の実践的現場において「日記指導」を実践し続け、梶田先生、日和佐先生、谷岡先生と三者三様の取り組みは、アプローチの仕方は異なるが、それは木下のいう「国語生活は思想交換の生活であり、思想交換の心身作用を通じて自己の発展に参するものは発展的国語生活であり又国語学習生活である」との原理を実践的立場で実験証明していると考えた。

「書くこと」による児童理解、そのなかでも特に「日記指導」に見られるように「教育現場人」が30年にわたって試行錯誤しながら積み重ねてきた自分自身の実践そのものを正しく方向づけていこうとする労作業であると考えるのである。

一人ひとりの目の前にいる子ども達のことを実際に観察し、一回一回の授業に労を惜しまず教師も子どもも学びの道を同じように歩む、その中でしか確かな学びの道は見えてこないのである。

前稿の中でも確認したところであるが、児童中心主義の実践をしている奈良女附属小の教師は「成長し続ける教師」いわゆる「自己改造し続けている教師」であると共に「不断の努力に支えられた児童理解」を有する教師であると言えるだろう。木下が児童理解をしつつ各教科の実践を『学習原論』や『学習各論』で詳細に綴っているものを参照してみても頷けるが、「教師の成長」と「児童理解」は表裏一体の関係、すなわち、大正期以来、児童中心主義のもと、児童理解に心血を注いで来たことによって「成長し続ける教師」集団となりえたのではないだろうか。

高久の言うところの第三の立場を持つとらえて、奈良女附属小での教育、営々たる実践の一こま一こまを、創価大学教職大学院で学ぶ一人ひとりが新たな視点でとらえ直し、真摯に学び、率直な研究成果を世に示していくこと、そして、教育者として一歩でも人間的に成長していくことが、労を惜しまず指導して下さった奈良女附属小の先生方はじめすべての皆様に感謝することになると考える。

参考・引用文献

- 1 木下竹次『学習原論』目黒書店 1923年
- 2 木下竹次『学習各論』上・下 教育の名著9 玉川大学出版部 1972年
- 3 牧口常三郎『創価教育学体系』牧口常三郎全集 第三文明社 1983年
- 4 池田大作『新・人間革命』「若芽の章13」2013年11月4日付け聖教新聞
- 5 同「若芽の章53」2013年12月23日付け聖教新聞
- 6 『創大教育研究』第23号 2014年3月 p. 1
- 7 小原国芳 日本新教育百年史8 玉川大学出版部 1971年2月 p. 414
- 8 木下竹次『学習各論』教育の名著9 玉川大学出版部 1972年 下 p. 19
- 9 同 p. 43
- 10 同 p. 19
- 11 佐賀県鹿島市立能古見小学校 平成13年度長期研修成果発表会 2002年3月19日～20日
- 12 木下竹次「創刊の辞」『学習研究』創刊号 1922年4月1日
- 13 『学習研究』455号 2012年2月号 p. 6
- 14 同 p. 12
- 15 同 p. 18
- 16 高久清吉『教育実践の原理』協同出版株式会社 1970年4月
- 17 同 pp. 39-40
- 18 同 p. 41
- 19 同 p. 42

